

ジンコソーラー、2024年モジュール出荷量は120GWへ 蓄電システムにも注力、日本法人社長 孫威威氏

ジンコソーラーは、2024年の太陽電池モジュールの世界での出荷量は、120GW規模を計画する。世界最大手の太陽電池メーカーの一社として世界でのモジュール出荷量が100GWを突破するほか、日本でも引き続きシェア首位を目指す。太陽電池のほか、同社では日本や世界で住宅や産業向けの蓄電システムも近年販売に注力しており、蓄電システムの国内外における展開へは、日本企業との協業も進める。2024年の太陽電池モジュール製品の販売計画や、蓄電システム事業の今後の拡大に向けた方針などについて、同社日本法人社長の孫威威氏にお話を伺った。

ー2023年の世界や日本での太陽電池モジュールの出荷量は。また2024年の目指すモジュール出荷量は

孫 2023年の当社のモジュール出荷量はグローバルで75GWとなり、また同年上半期時点でのグローバルの出荷量は世界1位となった。また、2023年のN型モジュールの出荷量は45GWを占めた。日本における年間の出荷量は算出中だが、2022年実績の1.2GWの出荷量から20~30%の増加を見込み、2023年も日本におけるシェアで1位を獲得し、2位以下の集団とは大きく差をつける。また日本での出荷量のうち、2MW以上の特別高圧案件向けの出荷量が5割を占めている。そして2024年のグローバルでの出荷量は2023年から40%程度増加し、120GW程度の規模を目指すほか、日本でも30~40%の増加を目指す。世界で100GWに出荷量が到達するが特別な感情はなく、これはあくまで想定通りのこと。気候変動対策を協議する昨年秋のCOP28の国際会議場にはジンコソーラー

も出展した。全世界で再エネのニーズは高まり、また日本でもFIT制度が収束し、自家消費モデルの時代がさらに加速すると考えている。



事業用蓄電システム
「SUNGIGA」

ーコロナ禍やウクライナ戦争など、近年世界で不確定要素が続きます。これらによる貴社の事業への影響は

孫 グローバルでは、中国では景気の減速に昨年見舞われたが、ジンコソーラーでは中国における事業の売上高が占める割合は20~30%ほどとなっている。他社だと中国での売上高の割合が5割程度を占めるケースもあるが、ジンコソーラーでは世界の各地域でバランスのとれた売上高の構成としている。海外での事業環境が厳しいときは中国の事業が、中国が影響を受けている際は海外の事業が互いにカバーをする。

ー太陽電池モジュールのほか、産業用や住宅向けの蓄電システムの販売にも近年御社は力を入れています

孫 日本では2023年6月に、住宅向け蓄電システムの「SUNTANK」がJET認証を取得した。昨年はその認証取得作業に注力してきたが、今年からは販売をより本格的に加速させる。認証を取得してから当社に寄せられる引き合いは非常に多くなった。また事業用蓄電システムでも日本で「SUNGIGA」の受注をすでに獲得し、SUNGIGAと高効率のTiger Neoモジュールを組み合わせたソリューションの採用実績も得た。SUNGIGAは、高性能なリン酸鉄リチウム電池により安全性を備えるとともに、高効率の液冷システムを採用していることなどが特長で、すでに2028年頃に納入される案件向けへの製品の引き合いも日本企業から寄せられている。



孫威威氏

ー日本での蓄電システムの展開強化へ、どのようなことに取り組みますか

孫 日本の制御機器メーカーなどとも協業しながら、蓄電システムや太陽電池モジュールとの組み合わせによるソリューションを展開する。日本国内で建設される案件のほか、日本企業やジンコソーラーが海外で受注を目指すプロジェクトでも、日本企業と協力する。日本企業とは競争するよりも協力を深めることが当社にも有益となる。ジンコソーラーの持つ生産能力やスケールメリット、世界でのブランド力と、日本企業に対する製品への信頼性を組み合わせ世界で展開するべきと考えており、これまでにTigerNeoモジュールと蓄電システムによるソリューションのメリットを紹介するロードショーも日本で開催してきた(文中写真はジンコソーラー提供)。